

自分史編

もしもあの戦争がなければ…。戦争によって変わってしまった人生の軌跡。

運命を変えた二つの転換期

—私の昭和史

鳥羽市 岡村 まさ

私の人生には、大きな転換期が二つありました。昭和十二（一九三七）年十一月十二日突然、姉なみが亡くなり、

私の運命は、このことで決定づけられました。人生の第一の転換期でした。

当時、義兄と姉は、父母を助けて、農業の傍ら食料品・酒・たばこ小売業を経営しており、二人の娘にかまわって幸福な生活を送っていました。三人目の子を、みごもった姉がその子共々なくなつたのです。

私はその頃大阪で、奉公をしていました。姉の死後しばらくして、義兄のところへ私を嫁に、との話がすすみ、姉の娘二人（二歳と三歳）の母として、あまりにも幼い、十六歳の母となりました。

店と子供は義母に託し、慣れない農作業で手の指や足の踵には大きなアカギレが絶えなかつたのを覚えています。さらに、初めての商売も大変でしたし、

農作業から家にかえると夕餉の支度や、子供達の世話と目の回るくらい忙しい生活でした。

義母は、「五黄の虎」生まれの気の強い、利口な人でしたが、未熟な若い私を時には優しく、時には厳しく、しつめてくれました。夫も影になり日向になり、私を助けてくれました。

昭和十四年十二月に長男が生まれ、私は十八歳で三児の母になったわけですが、夫は、向学心に燃えていたが、義母の主張で渋々百姓をしていましたが、村役場より職員として勤めなかつたの薦めがあり、義母と私を説き伏せて、勤務係として就職をしました。

長女が昭和十五年、次女が昭和十七年に、小学校へ入学し、我が家にもさやかな幸せの日々が訪れました。しかし、夫が勤めに出たため畑が荒れてきたことを理由に、義母が夫に役場を辞めるよう強く迫り、親孝行の夫は根

負けし、役場を辞職しました。私の運命を大きく変えた第二の転換期でした。

役場を辞めて一週間目の昭和十八年八月十三日に召集令状が届き、八月二十日に夫は入隊しました。この時私は、お腹に三女を妊こもっていました。

八月二十五日に久居の連隊に家内中で面会に行き、おいしい食べ物を食べる夫と、楽しい思い出を作りました。後になって考えれば、これが夫と顔を合わせた最後、この世の別れだったのです。

その後北支より便りがあり、山西省に移るとのことでした。昭和十八年十一月、父の顔を知らない、三女が生まれました。

この頃、夫からは三女を写した家内全員の写真を送れとか、陸軍の無線学校に入ったので「無線教範」という本を送って欲しいとかの連絡があり、工面して戦地へ送ったものでした。昭和二十年沖縄へ転属したとの連絡があったのを最後に、便りはありませんでした。

七月に入り「沖縄が玉砕した」との

報らせを聞き、がっくりしたものの夫の無事は皆が信じていました。

八月十五日には、『終戦の放送』は義母や子供達と一緒に、意味もわかりにくく、聞き取りにくいラジオで知りました。

夫は必ず、生きて帰って来ると、信じておりましたが、その後、近所のかたがたは帰還してきます。子供達は「うちのお父さんは、まだか、まだか」と、義母と共に、心待ちにする毎日でした。食べ物は少なく、食べ盛りの子供達の分を確保するのに、家中で困り果てました。

昭和二十一年二月頃、戦死らしいとの手紙がきました。信じられずに、県の世話課や、終戦当時一緒にいたという浜松の人等に問い合わせましたところ、沖縄の首里で戦死したという情報がありました。家族一同、「子は、夫は、父は、いつ帰るか」と、待っていた望みの糸がぷつりと切れて、目の前が真っ暗になりました。

昭和二十二年四月に、役場から遺骨を取りに来るよう連絡があり、親戚の

方に受け取りに行ってもらいました。前後して、ビルマ（現ミャンマー）へ出征していた夫の弟の戦死の知らせがあり、二人の葬儀を出しました。義母は、「最愛の息子を二人も亡くして、泣くにも泣けない」といって、歯を食いしばりながら頑張ってくれました。私も、どうしてもこの子供らを大きくしてゆかなければ、という気持ちでした。

当時は、みんなが厳しい時代でしたので、戦没者の遺族といえども同情してもらえない状況ではなく、私は男の仕事も請け負い、長男の成長を待つて頑張りました。義母の支えと、子供達の声が無ければ、頑張り通せなかったかも知れません。

早いもので、時代も変わり平成十八（二〇〇六）年、終戦後はや六十二年が

経過しました。現在は子供四人、孫九人、

ひ孫十人に囲まれ、みんな元気で「ばあちゃん、ばあちゃん」となついでくれ、亡き夫に見て欲しいと思うくらい楽しい毎日ですが、身体の調子が思わしくなく、あちらこちらが痛くて、毎日、病院通いをしていきます。若い時から無理をしたためかと、思います。

過去を振り返ると、なぜ人間が殺し合うこんな戦争をしなければならなかったのでしょうか。原因はいろいろとあるでしょうが、これからは、私のような苦労は誰にもして欲しくないという思いでいっぱいです。世界が、平和でありますように祈ります。

かえり見て 書きいるうちに 涙して

寒き夜長を 語りいるかな

苦難を越えて — 婦人部と共に —

津市 川北 富美

紀元二六〇〇年と、日本中が祝った昭和十五（一九四〇）年に結婚、二人の子どもに恵まれましたが、幸せな時は僅かでした。

主人が召集された後、昭和二十（一九四五）年七月二十四日の大空襲で家

は全壊し、家族五人が壕で生き埋めに

なり、助け出されて九死に一生を得て喜ぶいとまもなく、またもや二十八日の空襲で全焼し、無一文になりました。

主人は戦死し、住むに家なく、生きる望みもなく、泣くにも涙さえ出ません

でした。

二十一年、遺族互助連盟が発足。さつそく創立メンバーとなり、焼け跡の街のバラックの家を、一軒また一軒と訪ね、戦死者遺族の会員を募りました。ちり紙や石鹸、マッチなどを売り歩いて資金をつくり、二十八年に今の遺族会と改称されたのです。遺族の中には子どもが小さくて働くこともできず、母子心中など痛ましい出来事もあり、二十七年八月に戦没者の妻同士励まし合おうと婦人部も結成されました。

平成十七（二〇〇五）年十一月十三日、日本遺族会婦人部は、終戦六十周年を期に、「新たな出発の集い」を開きました。全国都道府県代表四十七名が、天皇・皇后両陛下のご臨席を賜り、平均年齢八十七歳となった私たちが五つのテーブルに分かれてお待ち申し上げている席にお見えになりました。私には皇后さまが先にお見えになり、優しい笑顔で私の顔をじつと見つめながら、「ご主人は、どちらでお亡くなりになったのですか」と、お尋ねになりました。「生後五十日と一歳半の子どもに両親、私を残して出征しました。二度の戦災で無一文になり、度重なる不幸で、泣くにも泣けませんでした」と、顔中涙で話す私を見ながら、「大変でしたねえ。これからは、どうかお幸せに暮らしてくださいね」とおっしゃられた皇后さまのお顔の、なんとお美しい

ことだろうと思いました。

次に天皇さまがお見えになり、やはりやさしい笑顔で、「毎日楽しく暮らしていますか」とお尋ねになりました。

思いがけないお言葉に、陛下のお顔をそっと見ますと、「からだによく気をつけてね」とにっこりほほ笑まれました。苦しい戦後を一生懸命生き抜いてきた一番の犠牲者だと思ってくださったのだと思いました。お帰りの際には、両陛下おそろいで「お元気で末永くお幸せにね」と、手を振って会場を後にされました。

今は戦争を知らない人が多くなりましたが、昭和四十六（一九七二）年、昭和天皇の御製に

戦を とどめえざりしくちおしさ

ななそじ（七十代）になり

今もなほおもふ

と、天皇でも止めることの出来なかった戦争のむなしさを悲しまれておられたのかと思います。昭和三十六（一九六一）年の婦人部の歌に、

背丈大きくすくすくと
一人びとりが君に似て
いと頼もしく育ちたり
みなはやさしき心根に
守られ守る樂しき我が家と

歌の一節ですが、当時をしのび今も涙が止まりません。

私も結婚二年四カ月の短い間で苦勞の連続でしたが、二十四歳の若さでしたからこそ、出来たのではないかと思えます。昭和四十九（一九七四）年に青年部（当時）が立てた「母の像」の「強くきびしく、やさしかった母」と碑文にある通り。婦人部の時計台と共に、靖国神社に参拝の折々には、お立ち寄りください。

平成十八（二〇〇六）年四月から女性遺児と一緒に、女性部と改称しました。母と子がたゆみない努力によって築き上げた平和と繁栄。苦難に満



生き残った大イチョウの木【津市西丸の内】(三重平和祈念館蔵)



銃痕が残るレンガ堀

(写真提供/山口謙次)

ちた戦中、戦後をしのび、英霊顕彰にこれからも努めてまいりたいと思います。

“ガタギ”の給食

四日市市 須原 賢治

私は小学校三年生の夏、縁台で天皇陛下の終戦の玉音放送を聞きました。

その頃は大変な食糧難で、周りが田んぼや畑ばかりの田舎でさえも食べるものが無かった時代です。夏休みが終わると、子どもたちは勉強もせずに、田んぼへ「ガタギ」を捕りに行きました。「ガタギ」とはこの地域の方言で「イナゴ」のことです。

稲穂の間を逃げ惑うイナゴを追いかけ素手で捕まえては袋に入れて、一杯になると翌日学校へ持って行きました。校長室の隣の応接間の床にイナゴの死骸が山積みになっていたので今でも忘れられません。

そのイナゴは味噌汁に入れられ、昼の「日の丸弁当」と一緒に食べました。今ではイナゴの佃煮は珍味として高級料亭等で出されたりしていますが、当時は美味いとは思わなかったし、茶碗の底にあのギザギザのノ



コギリのようなイナゴの足が残っているのを見ると気持ちが悪くなったものです。

半ば栄養失調状態だった当時の子供達の体力を心配して、母親達がイナゴでダシをとった味噌汁を作ってくれたのだと思います。

今から思うとこれが六十年前の小学校の給食だったのです。こんな時代に成長期を過ごした者が健康で古希を迎えられたことは正に英霊のご加護の賜と感謝するとともに、ほんとうに日本は豊かになったものだと実感します。

何にも無いあの頃にあんなに沢山いたイナゴも日本の高度成長とともに何処かへ消えてしまえばほとんど見られなくなりました。しかし、嬉しいことに今年（平成十八年）の秋はコンバインの周りで飛び跳ねる多くのイナゴの姿を見ることが出来ました。

自然環境が少しは昔に戻った証拠だと思えます。勢いよく飛び跳ねるイナゴの姿を見て昔を懐かしむとともに六十年前の忌まわしい戦争のことを思い出し、二度と「ガタギ」の給食を口にするこの無い平和な世の中が永久に続くことを祈ります。

父より四十年生きながらえて

南牟婁郡御浜町 東地 昇

父は昭和二十（一九四五）年、母が二十八歳、妹が四歳、私が小学一年生の時に東部ニューギニアで戦死している。

私は今年古稀（七十歳）を迎えたが、父が戦死したのは三十二歳だったから、父より四十年近く長生きをしてきたことになる。何よりも母が二十代で独り身となり、私と妹のために一所懸命生きて下さったことに先ず感謝をしなければならぬ。

父の出征後の戦時中から終戦後の四五年は、どこの家庭でも大変な苦労のあったことはいうまでもないが、母子家庭となった我が家は、それにも増して苦難の生活を体験しなければならなかった。

そんなことで、私は子供の頃から、気ままな生活は許されなかった。父が亡くなってからは、母にならって朝夕の二度、仏前に手を合わすことを忘れず、毎日お供物をし、家族の一日の安泰を祈っている。父の命日には必ず墓まいりも行き、三人の子供達も、必ず仏前に合掌している。

子供の頃から、母によく「家には父がいないから」と励まされて育ってきた。だから、いつも父親のいる家庭を羨ましく思ってきた。中学校から帰

と、母を助けて農業を手伝ってきた。母子家庭のためか、いじけ根性と劣等感を持った中学生時代であった。

昭和二十九年三月、中学校を卒業すると、すぐに母を助けて農業に従事しなければならなかった。卒業した三月十四日のその日から日記をつけはじめ、現在まで五十五年間続けている。朝夕の仏前の祈りと日記を書くことが、農業以外の私の日課となっている。

今でも時どき、卒業時代の日記を引っ張り出しては昔なつかしく想い出している。私の農業は稲作と柑橘栽培だが、五十年前のミカンの出荷は、荷車に積み、母と二人で共同撰果場まで運んだと書いている。撰果場までの行き帰りに、時どき高校に通学する同級生に出会うことが辛かったとも書いている。今思うと、頭が良くないのに高校に行きたかったのかもしれない。五十年前昔は進学率三〇%位で、中学卒業生を乗せた就職列車が都会へ走った時代だった。父が居たら進学できたかもしれないと思うと、ちょっと残念な気がする。

青年時代になり「友達は大変にして誰とでもつき合える人間になれ」との母の言葉に、一人でも多くの友を求め

て、大勢の友達ができた。みかん栽培に懸命になってきたが、その頃三重県の柑橘品評会があり、努力が実って県下で一人知事賞を受賞させて頂いた。二十歳の頃で母がとても喜んでくれた事を思いだす。母子家庭の劣等感が、この頃より持たなくなってきた。

昭和五十二（一九七七）年、父が戦没した東部ニューギニアの慰霊巡拝に参加し、激戦の各地を巡った。父が戦

死した近くで慰霊祭をして頂き、いろいるな想いが込み上げて涙を止める事ができなかった。ちょうど父の三十三回忌に当たり、墓地を求めて碑を建てニューギニアの土を埋めて供養を済ませ、母も一安心したようだった。ともあれ、父より四十年近く長生きをして、父が経験し得なかったさまざまな物事を得ることは、生かされている私にとってどれほど貴重なことであつたか…。

母子家庭の生活環境であつたからこそ、現在の私があるのだらうと思う今日この頃である。

私の家庭の誇りは、母が九十歳で健在、孫五人、曾孫九人がいることだ。宝物は素晴らしい家族と日記帳五十五年間分、そして、これまでに柑橘品評会で入賞した表彰状約二十枚である。父達御霊のご冥福と国の恒久平和を祈る。



昭和45年 みかんを収穫する当時31才の私

今日よるびび 一六十二年ぶりの遺骨帰還

松阪市 山際 良

平成十六（二〇〇四）年十二月、厚生労働省から「モンゴル、ウランバートル収容所で戦病死の夫・正の遺骨を、遺骨収集団のお世話で預かっている。身元確認の為にDNA鑑定を希望か、否か」との連絡を頂き、早速、息子と夫の妹の検体を送りました。二年近く過ぎて何の音沙汰もなく、なかば諦めておりましたところ、十八年三月下旬に同省から、「血縁と認められました」との通知を頂き、最初は家族一同信じられない様な驚き、次に「よかったあ」



61年ぶりに帰ってきた遺骨

(写真提供/朝日新聞社)

と喜び合い、感激ひとしおでございました。

それからは、滅多に例のない事なので、何をどうしたらよいのやらさっぱり判らず、あれや、これや、と話し合ったり、新聞などで他県の方の様子を見たり、同じ松阪市内の方で、私共より十日位早くご遺骨をお迎えの様子を新聞で拝見したり、話を伺ったりしておりました。

遺骨帰還の日が近づいた頃、夫の妹達や他の親類等から室内用の生花やら、お供え物が次々に届けられ、真新しい祭壇に遺影をかざり、帰還を待つばかりとなり、胸が一杯になりました。

いよいよ当日五月二十三日、朝から雨降りて心配をしておりますが、大勢の方々が迎えに集まって下さり、家中一杯になりました。報道関係の方々も大勢来て頂きました。夫もさぞかし、有難く嬉しかった事と思います。

六十二年振りに我が家に帰った夫の遺骨を、夫の三人の妹の家族と、息子達家族一同と共に迎えられることは、とても幸せでございました。

県の職員から白木の箱を頂きま

した時、あまりの重さで私は落としそうになり、隣りにいた息子に支えられ母子でしっかり胸に抱く事が出来ました【写真】。父親を写真でしか知らない息子の目に涙を見て、その胸中を思い切なくなりました。この日は私共にとって、生涯忘れることの出来ない日となりました。

九月十八日の命日を明日に控えた十七日、家族一同と妹達で無事納骨をすませ、冥福を祈りました。夫も、祖母や父母と長い間離ればなれになっていましたが、一緒になることができ、心安らかに、これからは私達を見守ってくれましょう、と自分の心を慰めております。

遺骨帰還の日から納骨の日まで、祭壇へお供えしながら、夫の応召後のこと、息子の誕生、叔父一家との生活、引揚船で新京から帰国のこと、その後私の病気療養のことなど、毎日毎日話をするのが、私の至福のときでした。思いますに、この幸せな日を迎えられたのも、義母に言われた言葉でした。

昭和十九（一九四四）年十一月に夫と結婚し、夫の勤務地であった旧満洲国（中国東北部）の首都・新京（現長春）で結婚生活が始まり、その半年後の昭和二十年五月に召集令状が届き、その日のうちに出征しました。当時私は妊娠五カ月の腹帯をしたばかりで、息子はおなかの中にいました。身体の変調で予定日より早く八月十六日、終

戦の翌日に誕生いたしました。小さい小さい子でしたが、困りの人々の暖かいお世話や、心づかいにより、すくすく育ってくれました。

夫の応召後、衣類などを売りながら母子の生活を一年近くし、翌昭和二十一年七月に叔父一家と共に、まだ歩けない子供を抱き、リュックを背負って、苦労を重ねて引揚船で葫蘆島（ころとう・中国遼寧省）を出発し、博多港に着き、無事夫の実家へ帰りました。その年の十二月、私の病気療養の為に息子を連れ私の実家へ帰り、二年近く養生して婚家に戻りました。その翌年県から、夫の戦病死の公報を頂き、夫の復員を信じて毎日待っていたのも、空しく消えました。

葬儀もすませ、息子の成長を楽しみに、義母と三人の生活に頑張らなければと心に決めていた時、義母から「親族会議で決めた事やけど、あんたはまだ若い、これから幸せな日がある。この家におらんならんと思わんでええ。この家から出ててもええのや。けど正義（息子）はこの家の大事な跡継ぎやで、連れて出てもろては困る。出る時はあんた一人で行ってんか」と言われ、私は頭をガンと殴られた感じで、しばらく口がきけませんでした。

私にとって息子は何物にも替え難い、大事な生きがいでした。とても別れて暮らせません。義母に「どうぞこの家に置いて下さい」と頼み、以来長い年

月、辛いこと、苦しいこと、心細くなり悲しんだとき等々、「これも自分で選んだ道や」と自分に言い聞かせ、乗り越えてきました。そのお陰で、今は息子達家族の暖かい支えにより幸せに暮し、思いもかけず夫の遺骨をこの家で迎える事が出来、やっぱり自分の選んだ道を歩んで来てよかった、この家についてよかった、とつくづく思う毎日です。

永遠に戦没者を祀る

あの戦争が無くて、何百万人もの戦死者が出なかつたら！
こんなことを、私は時々考えます。

山口家の二男として生まれた私は、終戦当時まだ十五歳。

長男として生まれ二十四歳で戦死した兄は、生きていれば山口家を継ぐことになり、他の人達と同じように、いろいろと地域に貢献し、平和な家庭を築いていたに違いありません。

戦争が無くて、戦死した全国何百万人の若者が生きていたら、それぞれ妻と家族を持ち、地域に貢献し日本の国を更に栄えさせ、それぞれが平均寿命の八十年を全うする筈でした。

戦死者の未来の権利が、あの戦争で

す。

まだまだ多くのご遺骨が預けられているようで、一日も早く、お一人でも多く、ご遺族の元へお帰りになることをお祈り致します。

征きより 生れし吾子に 抱かれて
白木の箱の 夫の重さよ

名張市 山口 繁一

中断されたのです。

その兄に代わって、私は今、遺族を代表して地域の戦没者の慰霊行事を執行っています。

私のふるさと（名張市青蓮寺地域）の戸数は、当時も今も変わらず約八十戸。

戦死した若者は、全戸数の半数に近い三十六人。

悲しみから早くも六十年が過ぎた今、戦争の話題が次第に忘れられようとしている今日です。

戦争の話をして、聞く耳を持たない人達が増え、戦争の話は通じなくなり、子供たちに話をして、実感

のない世相になりました。

毎年八月十五日の全国戦没者追悼式、七月には三重県が、十月には名張市が、それから各地域では、それぞれに追悼式が執り行われます。

国、県、市、各自自治体が、毎年戦没者追悼式を主催して下さることに感謝しながら――。

地域の遺族を代表する私の責務は、永久に、戦死者の慰霊を行ない続けることでした。

何とか、人々の関心が薄れないような方法がないものか考えました。

そして、戸数約八十戸のほぼ百分近い檀家を持つ「地藏院青蓮寺」本堂が、最も人が集まり効果的な場所だと気づきました。

この寺院の本堂に三十六柱の遺影を掲げること考えたのです。

掲げる場所、スペース、写真の大きさなど、最初は寺院関係者からのクレームに、話し合いがつづき、

終戦五十年を契機に、写真のように掲額が実現しました。

すでに掲額から十年。寺院を護る檀家の方々、こども道場に参加する子供たち。本堂

を利用する数々の催しに参加する方々、うわさを聞いて参拝する方々などが目をとめてくれます。

対応する住職が、自ら戦没

者の掲額に目を向けさせ、「戦争と平和」を説話する慣わしになりました。
早や遺族会結成六十年、大昔の時代の出来事のように忘れられようとする戦争のこと、何百万人の若者が散った戦争、そして訪れた平和、生きている私たち遺族は、永く永く永遠に、戦没の御霊をお祀りし続けなければならぬ責務を負っているのです。



名張市青蓮寺に掲げた英霊額